

「異文化」の理解を目指した研修旅行 (VI)

—— “瀬戸内海中部(芸予地域)の文化史” の実地研修 ——

戸田利彦・秋枝(青木)美保

In the last paper, a small field trip to study regional cultures held during the Japanese language and culture courses of a university was analyzed and problems were summarized for future plans and practices of study camps and field trips. This paper focuses on a field trip to study regional cultures. It is planned and put into practice for the purpose of understanding cultures of Geiyo district in Hiroshima Prefecture and in Ehime Prefecture. Characteristics of it are summarized as follows.

- 1 This field trip is a result of two field trips in Kyoto, a study camp in Hiroshima City, a small field trip in Hiroshima Prefecture, a field trip in Setouchi and a field trip in Shimane Prefecture.
- 2 Regional study concerning history of culture in Geiyo district is stressed in this trip.
- 3 This field trip includes two lectures by local speakers.
- 4 This field trip is planned and put into practice mainly by students who are the members of Hijiya University Japanese Language Culture Society.
- 5 An inspection trip by teachers and students is made before this field trip.

Practices of a field trip are analyzed based on questionnaires filled out by the participants.

Then, problems are summarized for future field trips.

はじめに

今年度のNHK大河ドラマは、若き人気狂言師を主役とする“時宗”である。この北条時宗は、若くして鎌倉幕府の執権職につき、一門内部や朝廷との緊張関係の中で、“元寇”という我が国未曾有の国難に立ち向かう。このような時代に、伊予松山の道後に、後に鎌倉仏教の一つ“時宗”の宗祖となる一人の人物が生まれる。河野通尚こと一遍上人である。河野家は、大山祇神社の三島明神を氏神としながら、その本地大通智勝仏への崇拜を深めていくが、源平の争乱の際には、後の三島村上(能島・来島・因島)氏となる村上水軍を従えて、当時の伊予の守護として源氏方に付き、壇の浦の戦いでめざましい活躍をしたことにより、鎌倉初期に繁栄の時を迎える。しかし、1221年いわゆる承久の変が始まり、北条家との縁戚関係により、朝廷側と幕府側の二つに別れることになる。一遍上人の祖父に当たる河野通信は、一族の大半と共に朝廷側に付き、幕府方の軍と戦うが破れ、所領のすべてを没収されてしまう。また、一遍上人の父河野通広は、当時僧生活を送っており、結果として参戦を逃れてはいるが、河野一族衰運の影響を受けざるをえなかったようである。このような状況の中で、一遍上人は誕生している。1274年、1281年の二度に渡る“元の襲来”は、それぞれ36歳と43歳の折りのことで、念仏ひじりとしていずれも諸国行脚の途上にあつた。“時宗”の宗祖一遍上人が、時の執権“時宗”と同じ時代を生きた人間であることは、漢字の偶然の一致同様に因縁めいたものを感じさせる。一遍上人は、1289年に他界するが、最後の1年間に大山祇神社の大三島明神に二度参詣している。

西行、宗祇などと共に吟遊詩人としても有名な一遍上人は、数多くの和歌を残しているが、そんな一遍上人ゆかりの大山祇神社では、1445年から二百数十年間に渡って連歌が詠み続けられ奉納されてきた。そして、それは俳句王国伊予の文学的基盤ともなり、やがて子規や漱石という傑出した俳人や小説家を生み出すことになり、その成果は、現在、松山市立子規記念博物館として結晶している。

今回の研修では、地域的にテーマを絞り込めなかった面もあるが、以上のように、研修場所として設定された〈因島水軍城〉〈大山祇神社〉〈松山市立子規記念博物館〉は、例えば一遍上人という媒介を通して見ると、それぞれが有機的に繋がっていることがわかる。それは、今回の主たる研修地域となった瀬戸内海中部（芸予地域）が、一つの地域文化圏を形成している証しとも言えよう。研修のネーミング‘土地のたからまるかじり 第3回 しまなみ海道を行く―大三島から松山へー’は、その点を固有名詞を用いて象徴的に表現したものである。

今回の日本語文化研修旅行は、全員参加形式の学校（日本語文化専攻）行事から自由参加形式の学会（日本語文化学会）行事に移行して三度目のものである。一昨年度実施した第1回及び昨年実施した第2回の研修の問題点^{※1)}をふまえ、事前実地調査の実施、文化接触としての宿泊場所及び施設の厳選などの新しい試みしながら企画・運営を行ったが、より充実した実地研修にするための新たな視点を発見することができた。そこで、本稿では、その計画から実施に至る経過及び結果の報告を行い、研修旅行のあるべき姿について考察することを目的としたい。

1. 実施までの経緯

瀬戸内海の文化について、いろいろな角度から研修を試みたいという意図が、この研修旅行の始まりから継続してあった。それで、第一回は「瀬戸内海における国際交流」ということで、鞆の浦・倉敷を廻って、中世から近世、近代にかけての国際交流史をたどった。今回は、しまなみ海道をたどって、大三島にわたり、海洋文化、水軍の文化をたどること、四国に渡って松山で、生誕百年を迎える正岡子規の跡をたどるというのが目的であった。さいわい、大三島は本学室山敏昭教授の恩師藤原与一先生の御郷里ということもあり、藤原先生の御舎弟、曾我定一氏に大三島での研修の道先案内をしていただいた。

実施前に、今回は初めて学生役員と教員とで事前実地調査を行い、研修地の状況が把握できた。また、学生役員の自覚を促す事ができた。

それに基づいて、恒例の「旅行しおり」資料編の編集作業を、学会役員を中心に行った。その内容は以下の通りである。

1. 因島水軍城、資料館の内容・金蓮寺周辺の遺跡について
2. 大山祇神社の歴史と見学スポットについて
3. 正岡子規記念博物館の内容について

今回は、事前講義を行わなかった。資料編も観光案内的なものになってしまい、事前調査の成果を資料に生かしきれなかった。あまり多くを載せても学生が読まないからということで、学生役員の意見によって削られたが、旅行の目的がずれてきている感があり、研修の目的の再確認が必要になってきている。

II. 実施内容とその問題点^{※2)}

今回は大山祇神社と正岡子規記念博物館でそれぞれ地元講師の方による講演を聞いた。大山祇神社では、武将から奉納された武具の展示などが有名で、当初水軍関係のお話かと想像していたが、木村三千人先生のお話は地元ならではの解説で、この神社に祭られた神が農業神であることを語られた。

奉納品の中で特に女帝の奉納した鏡が取り上げられ、夫を戦いに送り出す女性の心遣いが思いやられた。中でも齊明天皇の奉納したといわれる「禽獸葡萄鏡」の美しさと大きさは人目を引いた。鳥の生活者としての先生の価値観と信念とは学生の心に強い印象を与えたものと思われる。先生の方も、若い世代に直接自分の考えを伝える機会を得られた事を大変喜んでくださった。

正岡子規記念博物館でも、ビデオと館長長谷川孝士先生のお話で子規の世界を概観することができた。特に、子規の自筆原稿に触れながらの子規の表現者としてのこだわりや、創造性を説明してくださり、具体的な指摘に基づくお話で興味深かった。子規世界のマイクロとマクロの両方に方向性を持つお話で感銘を受けた。

二日目は子規記念館の見学のあと、グループ行動で松山市内見学を行ったが、目的意識が希薄な事もあり、ともすれば観光的な行動に終わったグループもあったように思われる。

Ⅲ. 実施後の冊子の編集—「土地のたから まるかじり」第3号

土地の講師の方に原稿を依頼した。木村三千人氏は、「大山祇神社」の歴史と信仰について、特に奉納された鏡についてレポートされた。長谷川孝士先生は、子規の直筆の墓誌名と辞世の句を取り上げ、そこに表現者としての子規の個性をレポートされた。

参加教員も、子規の「写生」、一遍と良寛の出家の思想など、それぞれの専門に関らせながら、レポートを執筆した^(註3)。また、学生役員との反省会を対談形式でまとめて、今後の企画への示唆を含めたレポートもあった。

学生のレポート原稿の提出状況は例年どおり、参加者の約四分の一である。楽しみながら知るといふことを、どのように企画したら良いか、非常に難しいことである。今回は統一的なテーマということが絞りにくく、一日目と二日目で内容が異なり、レポートを執筆するにあたり、学生の関心も絞りにくい状況があったと思われる。

Ⅳ. 研修旅行及び研修合宿についてのアンケート調査

(1) 調査の目的

2000年度日本語文化専攻研修旅行への参加学生に対して、研修旅行の内容に対する評価・意見と研修合宿についての意見を主として求めるアンケートを実施した。

(2) 調査の方法

帰りのバス内で、調査用紙^(註4)を配布し、単なる評価点を示すだけではなく、今後の改善へ向けてのコメントを期待している旨を付言した。

(3) 回収率

当日中に36名中35通(97.2%)の回収を得た。

(4) 研修旅行に対する評価・意見と研修合宿についての意見

(Ⅰ)(Ⅱ)は研修旅行に対する評価、(Ⅲ)(Ⅳ)は研修旅行に対する意見、(Ⅴ)(Ⅵ)は研修合宿についての意見をそれぞれ求める項目である。

(Ⅰ)(Ⅱ)の評価については、5段階評価(1~5)を得点化し、ヒストグラムを作成すると共に、平均値及び標準偏差(得点のバラつき具合を示す数値)を算出した(図-1)。尚、図中の“AVR.”は平均値、“S.D.”は標準偏差を示す。

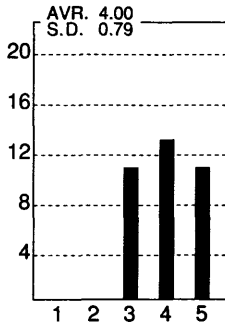
(Ⅲ)(Ⅴ)については、選択式による意見の集計結果を円グラフで示した(図-2/図3)。

[研修旅行に対する評価]

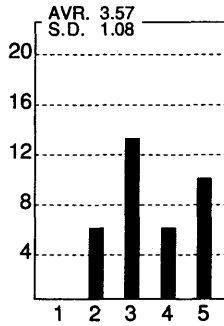
図-1

(1) 研修旅行についての自己評価

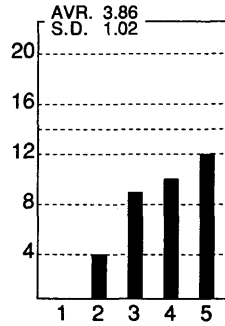
[1日目午前]
因島水軍城



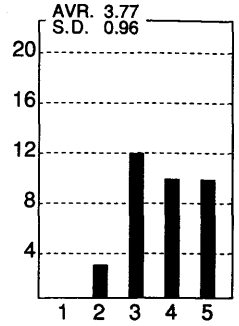
[1日目午後]
大三島町役場での講演



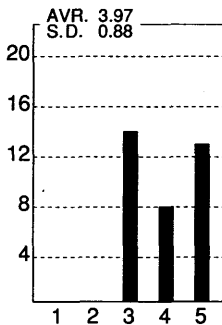
[1日目午後]
大山祇神社



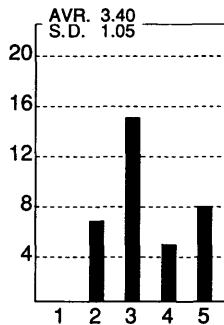
[1日目午後]
大山祇神社宝物館



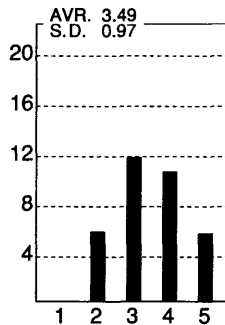
[2日目午前]
子規記念館



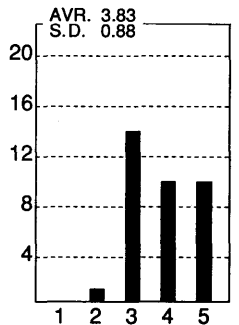
[2日目午前]
子規記念館での講演



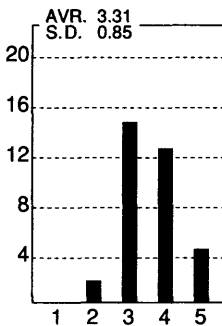
[2日目午後]
松山市



イベント以外の自由時間

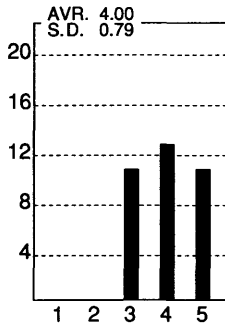


総合的達成度

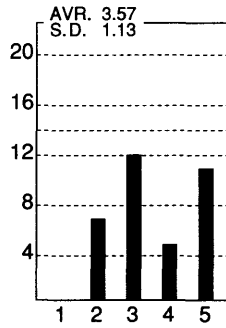


（II） 研修旅行のイベント企画について

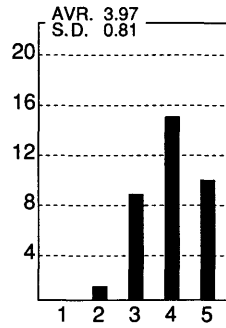
〔1日目午前〕
因島水軍城



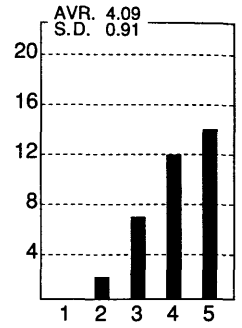
〔1日目午後〕
大三島町役場での講演



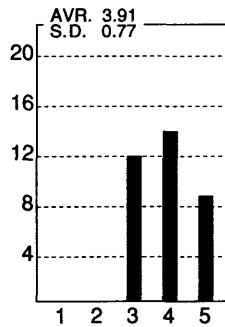
〔1日目午後〕
大山祇神社



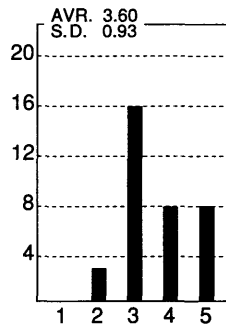
〔1日目午後〕
大山祇神社宝物館



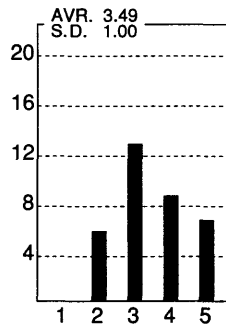
〔2日目午前〕
子規記念館



〔2日目午前〕
子規記念館での講演



〔2日目午後〕
松山市



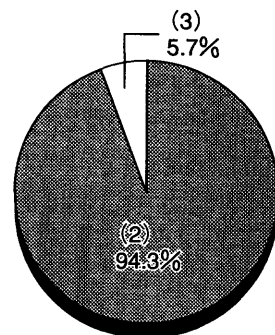
【研修旅行に対する意見】

図-2

(Ⅲ) 研修旅行の日時・日程・費用・場所について

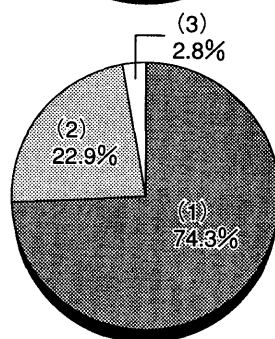
①〈時期〉

- (1) 年末・年始を外した冬休み中に実施するのがよい。
- (2) 今回のように春休み中に実施するのがよい。
- (3) 夏休みの終わりに実施するのがよい。
- (4) 夏休み始めの集中講義終了後（8月7日前後）に実施するのがよい。



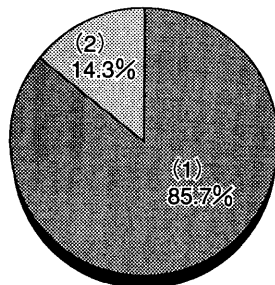
②〈日程・費用〉

- (1) 今回のように1泊2日でよい。
- (2) 費用を2万円程度自己負担しても2泊3日ぐらいがよい。
- (3) 〃 3万円 〃 3泊4日ぐらいがよい。
- (4) 日帰りがよい。



③〈場所〉

- (1) 今回は大三島・松山（芸予）地区でよかった。
- (2) 萩・津和野（長門）地区の方がよかった。
- (3) 岩国（周防）地区の方がよかった。
- (4) 福山（備後）地区の方がよかった。
- (5) 奥出雲・出雲地区の方がよかった。

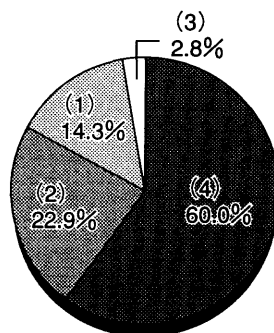


【研修合宿についての意見】

図-3

(Ⅳ) 研修旅行と研修合宿について

- (1) 費用が安くすむところ（例 広島市内公共施設1泊2日3000円）で、研修合宿を全員参加で行う。
- (2) 費用が比較的にかからないところ（例 広島県内及び周辺2泊3日2万円）で、研修合宿を全員参加で行う。
- (3) 費用はかかる（例 京都2泊3日5万円／東京3泊4日7万円）が、研修合宿（旅行）を全員参加で行う。
- (4) 全員参加の宿泊をとまなう研修合宿は特に必要ない。



(5) 結果の考察

① 研修旅行に対する評価

まず、学生の自己評価について考察しておきたい。〈総合的達成度〉の平均値が3.31となっているように、学生は総合的に成果があったと考えている点をおさえておきたい。一昨年実施した“瀬戸内（福山・倉敷）国際交流史”をテーマとした研修旅行の（総合的達成度）の平均値は3.20であったが、それに比べると数値的には高いが、昨年実施した“島根（奥出雲・出雲）鉄の文化史”をテーマとした研修旅行の3.55と比べると若干低い数値となっている。標準偏差0.85と分散が小さく、評価を3あるいは4とした学生が多い。今回の研修旅行のタイトルは‘しまなみ海道を行く－大三島から松山へ－’であり、目的として、‘瀬戸内海中部（芸予）の古代から近代にかけての日本語文化に関わる民俗資料及び文化資料を、実地踏査し、地域文化を通して専門領域へのアプローチを行う’ことをあげている。「しまなみ海道」といういわゆる有名な観光ルート名をタイトルとして設定した背景には、研修のテーマがやや絞りきれなかったことがある。1泊2日の日程で日本語文化専攻の研修旅行として、はじめて海を越え、四国に渡ったわけであるが、“広島市からバスで宿泊地松山へ”という制約の中、研修のルートと研修地がおのずと限定されざるを得なかったことによる。また、今回、はじめて、松山市という、県庁所在地でかつ比較的大きな市街地を持つ都市が自由研修地として設定されたが、“子規と漱石”という文学者を中心とした研修となり、“その土地に直接触れかつその歴史的背景のもとに学ぶ”実地研修としてはやや印象が薄かったと言えよう。研修地は、街そのものが歴史的背景を明確に持ちかつそれが比較的限定されたエリア内に集約されていることが望ましい。次回、仮に“芸予地域”を研修地域として少し拡大して設定するならば、2泊3日に日程を延ばしてでも、大洲市や宇和島市まで足を運びたいものである。視点を変えて言うならば、四国を研修地域として設定するならば基本的前提として“2泊3日の日程”とすべきであるということである。

一方、〈イベント以外の自由時間〉の平均値は3.83とかなり数値的に高い（昨年度は3.61）。その要因として、まず昨年度同様バスによる長距離移動があったものの、その大半が“しまなみ海道”という観光道路であり、乗車中車窓からの眺めを楽しめた点があげられよう。また、宿泊地が道後温泉街であり、温泉巡り、土産物店回り、散歩など、特に夜の自由時間を充実して過ごせた点も大きかった。さらに、宿泊所が共済組合関係の施設であり、新しくはないが、昨年度の国民宿舎よりも設備や管理体制が整備されていた点も見逃せない。以上は、主にハード面での要因であるが、バス内での喫煙管理、人間関係を考慮した部屋割り、夜の間食の配布など、企画者側によるきめ細かな配慮といったソフト面の充実も要因としてあげられよう。前回までの研修の課題の一つであった“宿泊地・宿泊施設そのものも実地体験の場所となるようにする”という点に関しては、達成できたのではあるまいか。〈研修時間〉を“正課”とするならば、〈自由時間〉は言わば“課外活動”のようなものである。研修旅行という研究教育活動全体の質を向上させるためにも、〈研修時間〉と〈自由時間〉という両輪に配慮しながら、今回の成果を今後も生かしていきたいものである。

七つのイベントを比較してみると、平均値4.00とあるように、学生はく因島水軍城（瀬戸内海の水軍、因島村上家などに関する資料）での館内研修に成果を得たと感じている。城内では小さいながらも充実した展示がなされており、かつ館の地元係員の人の丁寧で人情味あふれる解説があったことが主たる要因であろう。また、地元広島県の因島村上水軍が日本の歴史の転換点と少なからぬ関係を持っていることも学生達のロマンを掻き立て、興味・関心を喚起したのであろう。村上水軍ゆかりの参加学生もおり、地域文化の研修が直接自己認識へと繋がる例も見られた。また、く子規記念館（道後松山の歴史、子規とその時代、子規のめざした世界など）での館内研

修〉に対しても、平均値3.97と評価が高い。これも、記念館自体の展示の質の高さと、館のガイドの方の丁寧な解説に負うところが大きい。特に、前者に関しては、名こそ“子規”の記念館(正式名称は、松山市立子規記念博物館であるが、本稿では、子規記念館と略記する)になっているが、展示の内容は“子規や漱石を生み出した松山の歴史や風土”である。当館は、言わば“伊予地域の歴史・文化が集約された施設”であり、学生の多様なニーズに対応できていた点が、高評価の要因であろう。〈大山祇神社(参道及び境内)での研修〉及び〈大山祇神社宝物館(神社の関連資料)での館内研修〉もそれぞれ平均値3.86, 3.77と比較的高い評価となっている。瀬戸内海の一つの島にすぎない大三島に、日本の歴史上重要な神社があり、付属の宝物館に鎧を中心に数多くの国宝が展示されていたことに感銘を受けた学生が多い。一方で、〈松山市内(松山城、子規・漱石関連史蹟など)での研修〉は、いわゆる自由研修であるが、平均値3.49と過去2度の研修に比べて(一昨年: 鞆の浦3.80, 倉敷美観地区4.24, 昨年: 大社町4.00)低い数値にとどまっている。これは、〈総合的達成度〉で前述したように、市街地の規模と歴史的背景の明確さの2点において、自由研修地としては松山市が必ずしも適切ではなかったことが、主たる原因と考えられる。一昨年の鞆の浦、倉敷美観地区、昨年の大社町と、時代こそ違え、いずれも貴重な歴史遺産が言わば真空パックされたがごとく保存され現代に集約的に再現されていた点は見逃せない。今回の研修で講演イベントとして実施した〈大三島町役場での地元講師による講演(大山祇神社の歴史を中心に)〉と〈子規記念館内での地元講師による講演(子規の時代と表現を中心に)〉は、それぞれ平均値3.57, 3.40とまずまずの評価であった。一昨年の反省から、昨年は講師による講演の形式を避け、現地での立ち会い説明の形式を採用したが、今回は敢えて講師による講演を復活させることになった。前者の講演は、本学の室山敏昭教授の尽力によって実現したものであるが、大三島町教育委員会との協力のもと、結果的に町の生涯学習講座とタイアップするかたちとなり、必然的に講演となったものである。また、後者は、研修の一カ月前に行った事前下見の際、当館の館長に直接講演を依頼し実現したものである。いずれの講演も、大山祇神社、子規記念館といった旧跡・文化施設での実地研修の導入として講師との入念な事前打ち合わせのもとに行った点が一昨年の講演とは異なり、その分評価の平均値も今回の講演(二つの講演の平均値は3.49)の方が高い(一昨年の同種の二つの講演の平均値は3.11)。研修参加者が現地で実際の体験をしながら講師に自由に質問ができる立ち会い説明会形式は、昨年度の結果に見られたように一般に評価が高いが、いわゆる講演会形式でも、その直後の実地体験との連携を考慮した講演内容についての十分な事前打ち合わせとその講師による現地での説明と自由な質問の時間が設定されるならば、実のある研修イベントとなることがわかる。無論、研修の目的にかなった、土地の人的“宝”とも言うべき地元講師の“発掘”がその大前提となる点にも留意する必要がある。本学の教員を中心に、その人的ネットワークを活用しながら、なんらかの人間の繋がりのある講師を講演者として設定できるならば、いわゆる観光旅行ともまた一般の研修旅行とも異なる参加者と講師の協同による手作りの研修としての独自性を持つことが可能となる。

以上を総括するならば、“松山市内での自由研修にはやや問題が残るものの、因島水軍城や大山祇神社を中心に瀬戸内海中部の海の歴史について、また、子規記念館では子規と漱石を中核として伊予の歴史について学ぶと共に、芸予という広島市と比較的近い距離にある地域に価値ある歴史的遺産や文化施設があることを発見し感銘を受けたし、バスによる移動は全ルートのほとんどが高速道路としまなみ海道という観光道路であったため比較的快適であったし、宿舎の背景としての道後温泉を中心に気の合う友人と共に有意義な時間も過ごせ、意欲を持って研修に参加できた”という参加学生の平均像を思い描くことができよう。

日本語文化学会の研修旅行役員(学生及び教員)が中心になって考案した研修旅行のイベント

企画に関しては、七つのイベント企画の平均値が3.80となるように、参加学生はかなり高い評価をしている。標準偏差の平均値も0.91と比較的分散が小さい。前述の〈総合的達成度〉の3.31と勘案すると、参加学生は、評価の平均値が3.49であった松山市内での自由研修はともかく、企画そのものの充実度をかなり認めた上でその完全消化のためには自らの意欲と行動の質の向上が必要なことを認識している結果となっている。特に、〈大山祇神社宝物館内研修（大山祇神社関連資料による地元文化の理解）〉と〈子規記念館での地元講師による講演（子規の表現に見る近代の文化の理解）〉は、企画に対する評価と自分自身に対する評価との間にそれぞれ0.32、0.20の差が出ている。前者は、源頼朝や源義経など日本の歴史の中でも有名な武将達が奉納した鎧や兜をはじめとする国宝・国重要文化財の展示された同館に対する敬意と親近感により、企画が高く評価されたことによるものであろう。また、後者は、この講演が研修2日目の午前中のイベントであり、前日の夜の寝不足による疲れが残った学生が自己評価を低くしたことが一因しているものと考えられる。一方、〈子規記念館内研修（松山の風土と子規・漱石の背景としての近代文化の理解）〉は、0.06というわずかな差ではあるが、企画に対する評価よりも自分自身に対する評価の方が高くなっている。これは、子規記念館の展示内容とガイドによる丁寧な説明によって参加学生の多様な知的好奇心が満たされたことを示していると言えよう。この研修企画以外は、すべて企画に対する評価は自分自身に対する評価と同じかあるいは高くなっており、研修地や研修施設、あるいは講師による説明などが評価されていると言えよう。

個人研修ではなく集団研修の形式には、親睦以外に“集団で行く”ことの必然性が必要となる。その点を考慮して本研修企画には必ずなんらかのかたちで“地元講師による講演”を入れるようにしている。一昨年は“地元講師による講演”を各1時間程度で三つ設定し、かなりの評価を得たが、えてして講師の話を一方向的に聴くというかたちになりがちな点は否定できない。その点への配慮として、昨年は文化施設そのものの持つ内容に即してより簡潔にかつ自由に質問ができるかたちとした。その結果、現地でのいわば“立ち合い説明会”としてイベント企画の中に溶け込むかたちとなり、いわゆる講演会としての独立した企画にはなっていないが、総じて参加学生の評価はよかった。従来の講演は、本学教員による事前研修及び研修中のバス内での講義によってかなり補われた。今回は、研修内容の専門性との関係で、結果的に本学教員自身による講義や説明等は設定できなかったが、可能ならば事前あるいは当日に行うことは有効である。大学における研究と実地研修を連動させる意味で、本学教員を人的“宝”の一つとして生かせる研修内容の設定と運用が求められよう。一方で、参加者の個別の知的欲求を満たしえるだけの歴史的背景と多様な地域文化を包含し、かつそれらを詳細にかつわかりやすく紹介してくれる文化施設を有する比較的コンパクトな場所を研修地として調査・発掘していくことが大切であることが改めて確認できた。教員と学生の双方が幅広く情報を集め、互いが連携して企画を練り上げるシステムを確立して行きたいものである。

② 研修旅行に対する意見

ここでは、〈時期〉〈日程・費用〉〈場所〉についての全体的な意見を確認した上で、個々の意見・コメントの中からいくつかを取り上げ考察しておく。

〈時期〉としては、今回のように“春休み中”が適当と考える学生が94.3%と大半を占める。残りが“夏休みの終わり”である。参加学生自身の間でも研修旅行は学年末という意識がかなり定着し、日本語文化専攻の年中行事の一つとして認知されはじめているようである。現実問題として今のところ実施時期を変更するのは難しいであろう。

〈日程・費用〉に関しては、今回のように〈1泊2日〉が74.3%、〈2泊3日2万円〉が22.9%、

〈3泊4日4万円〉が2.8%である。一昨年度、昨年度の同様の調査では、〈2泊3日2万円〉がそれぞれ11.1%、31.6%であったことを考えると、数値に多少の増減はあるが、費用はかかって日程の延長を希望する参加学生が一定数はいる感がある。学生は費用がかかることを極端に嫌う。今回は、私学財団からの助成と教育関係の公営宿舍の割引利用により、参加者の個人負担をかなり低く押さえることができた。研修の自己達成度も、学生にしてみれば、現実的にはかかった費用を無視することはできない。仮に〈2泊3日1万円強程度〉なら、相当数の学生が日程の延長を支持するのではあるまいか。その意味でもより充実した研修の実現には、助成金の確保と安価でそれなりの質を持つ公営宿舍の選定が必要となる。

〈場所〉については、〈今回は大三島・松山(芸予)地区でよかった〉とするものが85.7%で、大多数の参加学生が研修地に関しては好意的であり、設定された研修地を納得した上で参加していることがわかる。特に、研修で初めて四国へ渡ることになったことが支持率を高めた要因と言えよう。一方で、昨年と同様の調査で7.9%の支持のあった〈萩・津和野(長門)地区の方がよかった〉とするものが14.3%いることには注意が必要である。参加学生にはいわゆるリピーターが多く、少なくとも在学中の4年間は毎年実施場所を違ったところにしてほしいという希望がある。また、可能ならば自分が希望するところに早く行きたいというのが本音であろう。〈場所〉の選定には、当然のことながら〈時期〉〈日程・費用〉などの制約を伴うが、何回かこのような研修旅行を実施し、その結果を分析・検討していく中で最低限四つの基本的なモデルを設定し、それを事前に学生に告知できるようにしたいという構想を持っている。たとえば、4年後に同じ場所に行くことになっても、それらの研修場所にふさわしい研修テーマを策定し、かつ社会状況を見据えながら少しずつ新しい視点を加えていくことによって研修内容のマンネリ化は防げると考えている。また、日程の延長が可能ならば、4年間に一度(例えば、オリンピックの年)には、世界の中の日本という地域文化を理解するために、京都や奈良などの伝統的な日本文化の代表地、あるいはその他世界遺産に登録されたような日本の旧跡や名勝を訪ねる企画があってもよからう。現在は、中国地方を中心に四国地方も視野に入れながらまだ行っていないところをその年度ごとに設定している段階であるが、将来的には、研修場所をある程度体系立てて設定できるようになれば有効である。

以下、研修のあり方についての意見・コメントからいくつかを取り上げながら、その問題点やあるべき姿を探っておきたい。

日程に関しては、「大山祇神社の宝物館はもう少しじっくり見たかった。(2年女子)」「宝物館をゆっくり回ったかった。(2年男子)」がある程度で、過去の研修に比べて日程についての問題を指摘するコメントは少なかった。〈大山祇神社宝物館(神社の関連資料)での研修〉は、計画では1時間を予定していたが、1日目の最後の研修イベントであり時間がおしており、また、松山の宿泊所への到着予定時刻に遅れないようにするため、講演の講師の方が同行し解説して下さるにもかかわらず駆け足とならざるをえなかったのは事実である。前述したように、国宝や国重要文化財が数多く展示されている同館が、企画側の予想していたよりも参加学生の知的好奇心を刺激したことも、このような意見が出てきた背景にある。しかし、日程全体としては、過去の反省に立ち、可能な限り余裕を持たせたことが、研修の充実にも有効に働いたと思われる。もちろん、高速道路やしまなみ海道などによってバスの移動による心身の消耗が軽減されたことも忘れてはなるまい。

研修地や研修内容については、「大山祇神社についての講演では、講師の先生が真実を追い求め、それによって戦の神というよりも稲作の神を祭ったとわかったという話に感動し、また宝物館に展示されていた鎧の染めの昔の技術が現在のものより優れていることに感銘を受けた。(1

年男子)」「今回の研修では、何人かは私と同じく研修の目的を体系的に理解できていなかったのではない。しかし、全体としては、そういう人でも把握しやすい内容であり、良い思い出も作れ、今後学ぶべき課題を持つこともできた。また、参加したいと思う。(1年女子)」「自分の住んでいる近くの地域で、素晴らしい文化や歴史があったことを実感できた。(2年男子)」「土着の文化(例えば、言い伝え)を肌で感じる事ができた点が一番うれしかった。(2年男子)」「目的に対する内容が良かったと思う。個人的に、四国については観光としての旅以外ではあまり興味がなかったが、今回の研修で、文人の子規や漱石など、文化の面でも興味がわいた。(3年男子)」「子規記念館のガイドの方の説明がとても丁寧で、最初は表面的にしかわからなかった子規の事がよく理解できた。今回の研修で一番ためになった。(4年女子)」など、研修地や研修内容に対する肯定的なコメントが多かった。一方で、「研修の目的と内容を十分に理解することは私にはなかなか難しかった。(1年女子)」「テーマが私には難しすぎた。(1年女子)」など、特に、1年生の中に専門研究へ繋がる研修のテーマについてとまどいを感じている参加学生がいた。学生の成熟度に応じて研修の成果は異なってはくるが、事前研修やパンフレットの充実などによってある程度は補えるのではなかろうか。今回の研修参加学生36名の内、1年生は11名いた。専門研究に入る直前の2年生は16名と最も多かったが、今後は、1年生もかなり参加することも想定して研修内容を設定することも必要であろう。

研修の方法に関しては、特に否定的なコメントはなかったが、「研修旅行では事前研修が重要である。当日も直前になんらかの説明があった後に現地調査をした方が効果的ではないか。(1年男子)」「子規記念館では自由に見て回る方法でもよかった。ガイドは必ずしも必要でなかった。(1年女子)」「研修のしおりはもっと早めに完成させて、それに基づいて事前研修を行なってほしい。(2年男子)」「専門領域への自主的アプローチには各自が十分な準備をする必要がある。(2年男子)」「フィールドワークはやりにくかった。事後のレポートが単なる旅行の感想にならないようにするには、事前の準備がかなり必要である。(2年男子)」といったコメントが見られた。ほとんどが、研修を充実させる上での事前準備の必要性に言及したものである。今回は、研修テーマがやや拡散的であったこと、学内に研修テーマに関わる専門の教員がいなかったことなどの理由で全体の事前研修の時間が設定できなかったが、テーマの絞り込み、学内の教員の専門性の活用、フィールドワークの方法の講習などの視点から、事前研修のあり方を再検討する必要がある。また、文化施設等でのガイドの利用も一考の余地がある。館内展示全体の説明は確かに懇切丁寧でわかりやすいが、自分の研究テーマを十分に持っている場合は、浅く広い説明は必ずしも有益とは言えないだろう。自分の興味・関心に従って見て回り、適宜質疑応答できる方法の方がよい場合もある。ガイドを立てるなら、可能ならば、研修テーマに沿って講演してもらった地元講師に同行説明を依頼するのが望ましい。それが無理なようなら、ガイドの説明は希望者を募る形式してもよからう。いずれにせよ、研修旅行を他の旅行とは一線を画した有意義なものにする上で、研修内容と共に研修方法の整備は、重要な鍵を握っていると言ってよからう。一方で、参加学生の側の研修テーマに関する問題意識の喚起と絞り込みが研修の成果に大きな影響を与えることも忘れてはならない。企画側(教員や学生役員)が学生のニーズに配慮しながら立ち上げた研修テーマの基本的な趣旨を理解した上で、参加学生一人一人が個別に課題を設定し、事前研修と実地研修を通して解決していくことが求められる。

研修そのものではないが、このような研修によって結果的に生まれる効果について言及したコメントもある。「先輩とも話すことができ、また様々な文化にふれることができ充実した2日間だった。(1年女子)」「今回はじめて参加したが、少人数で行動しながら研修できて楽しく面白かった。次回も参加したい。(2年男子)」「研修当日は、学生に指揮をまかせた方がいい。ミー

ティングで教員と学生が打ち合わせを済ませ、後は学生に運営させればいい。(3年男子)」などである。ここでは、研修旅行によって、日本語文化学会の構成員同士の対等な立場での‘親睦’効果が見られる。同級生同士、先輩・後輩、教員・学生の人間的な交流の場という視点から、今後の研修旅行を検討してみることも有効である。

以上の考察を通して明らかになった今後の課題は、‘研修テーマの絞り込みと本学教員の専門性の活用’‘歴史的背景が明確でかつエリアが比較的コンパクトな自由研修地の設定’‘参加学生自身の研修テーマの意識化・絞り込みとそれを補完するフィールドワークの方法に関する指導を含む事前研修の設定’‘4年間を1サイクルとした研修旅行計画の策定’ということになる。今後の研修の企画・運営・実施に生かしていきたい。

③ 研修合宿についての意見

全員参加形式の研修合宿については、4年前に一度試みた後は諸事情により実施してはいるが、今回のような自由参加形式で移動を伴う旅行を中心とした研修に参加した学生がどのように考えているかを調査する目的でアンケートを行った。ここでは、〈研修旅行と研修合宿〉の関わりについての全体的な意見を確認しておきたい。

“全員参加の宿泊をとまなう研修合宿”を行うことに対しては、60.0%の学生が“特に必要ない”としている。一方で、(2)の“費用が比較的かからないところ(例 広島県内及び周辺2泊3日2万円)で、研修合宿を全員参加で行う”が22.9%、(1)の“費用が安くてすむところ(例 広島市内公共施設1泊2日3000円)で、研修合宿を全員参加で行う”が、14.3%、(3)の“費用はかかる(例 京都2泊3日5万円/東京3泊4日7万円)が、研修合宿(旅行)を全員参加で行う”が2.8%、と、今回の研修に参加した学生の約40.0%は、“費用がかからない”という前提はあるものの、“全員参加形式の研修合宿あるいは研修旅行”に対して積極的である。しかし、今回の参加学生の過半数以上の60.0%が否定的であることも事実である。また、アンケートの母集団を日本語文化専攻の学生全員に広げた場合高い支持が得られるかとなると甚だあやしい。‘専門研究への自主的なアプローチ方法’としての全員参加形式の研修合宿に対して、一般に学生はあまり積極的ではなく、今の時点では見送らざるえないのが現実である。

以上の結果が示すように、現時点で、全員参加形式の研修合宿を単独で行うことは難しいと言えよう。したがって、現実的には、今回のような研修旅行を実施する中で、学生の問題意識をより明確にさせ(例えば、研修旅行前あるいは旅行中に自主研修の計画や成果について発表する時間を設定する)、研修の内容を授業内容と関連付け(例えば、基礎ゼミや専門基礎講義などで、教員が自分の研究と地域文化の研究との接点について話す時間を設定する)、なるべく多くの学生の参加を促し(例えば、4年間単位であらかじめ基本的なコースとテーマを設定しておき、在学中に一度は参加するように奨励すると同時に大学院生や卒業生も含めた日本語文化学会の親睦会的要素を加味する)ていくことが大切であろう。今後の検討課題としたい。

終わりに

昨年度の課題として残った‘長距離移動を伴う場合の日程の弾力化’と‘文化接触の場としての泊場所及び施設の選定’に関しては、今回は比較的うまくいったのではないかと思われる。前者に関しては、研修地を基本的に3箇所だけに絞り込むことによって、また、後者に関しては、研修地との関連を踏まえた上で、予算と施設内容のバランスを考慮し徹底的に調査選定することによって実現できた。いずれも、研修1ヵ月前に行った企画側(担当教員と学生役員)による事前実施調査(研修と

同一行程)の成果によるところが大きい。一方で、“研修テーマの絞り込みに伴う内容の重複の調整”については、研修テーマそのものが十分に絞り込めなかったため、結果として“重複”の問題は起きなかったものの依然課題として残ったままである。また、“参加学生自身の研修テーマの意識化と絞り込み”については、参加学生の学年間のレベルの調整という新たな課題が見えてきた。事前・事中の企画を設定する際に考慮していかなばならない。さらに、今回の研修で最も問題となったのは、“歴史的背景を明確に持った比較的小規模な自由研修地の設定のあり方”であったと言えよう。来年度も今回と同じく私学財団募集の「特色のある教育研究の推進」の企画として認められ、予算がつくことになった。津和野・萩を研修地と設定し、内容の検討を始めている。上述の残された問題点について引き続き検討しながら、今回の結果も踏まえて、新たな課題の克服につとめていきたい。

〔注〕

- (1) 秋枝（青木）美保・戸田利彦「『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅳ）－“瀬戸内（福山・倉敷）国際交流史”の実地研修－」,『比治山大学現代文化学部紀要』第6号,1999
戸田利彦・秋枝（青木）美保「『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅴ）－“島根（奥出雲・出雲）鉄の文化史”の実地研修－」,『比治山大学現代文化学部紀要』第7号,2000
- (2) 日程表を〔資料1〕として掲載した。
- (3) 本稿の執筆者である戸田・秋枝（青木）は、この研修記録報告書に、それぞれ「一遍と良寛の出家の要因と思想について－「氣」の思想との関連を中心にして－」（P.7～22）,「正岡子規にとっての「写生」の意味－起死回生の方法,現代における言葉の崩壊を乗り切る方法－」（P.23～31）という小稿を執筆し掲載した。
- (4) 調査紙（B4で2枚）を〔資料2〕として掲載した。
尚、本稿は、「はじめに」「Ⅳ. 研修旅行及び研修合宿についてのアンケート調査」「終わりに」を戸田が、「Ⅰ. 実施までの経緯」「Ⅱ. 実施内容とその問題点」「Ⅲ. 実施後の冊子の編集－「土地のたから まるかじり」第3号」を、秋枝（青木）が担当執筆した。

〔資料1〕日程表

3月13日（火曜日）	3月14日（水曜日）
8：00 集合（広島駅北口）	7：00 起床
8：30 出発	7：30 朝食
11：00 因島水軍城跡	8：50 出発
11：45 出発	9：00 松山市立子規記念博物館
12：00 多々羅公園	（館内見学）
12：45 出発	（スライド上映）
13：00 大三島コミュニティーセンター	（講義 「表現に生きた子規」）
（講義「大山祇神社の歴史」）	11：00 松山城, 到着後解散
14：30 大山祇神社・宝物館	（松山市内自由研修）
16：00 出発	15：30 JR松山駅集合
18：00 松山市内着	16：00 出発
19：00 夕食	19：30 広島駅
20：00 ミーティング	
23：00 就寝	

〔資料2〕研修旅行についてのアンケート

() 年生/男・女 (○をつけて下さい。) ※3月14日(水)実施

研修旅行についてのアンケート

日本語文化専攻研修行事をより充実したものにしていくために、評価や意見・コメントを聞かせて下さい。

(1) 研修旅行についての自己評価(自分自身に対する評価)

- (a) 以下の基準で、それぞれの項目の1～5の数字に○(マル)をつけ、自己評価をして下さい。
 1 無駄であった 2 あまり有意義でなかった 3 普通 4 有意義だった 5 たいへん有意義だった
 (b) そのような自己評価をした理由を中心にそれぞれの項目にコメントを書いて下さい。

<1日目>

- ①【午前：因島水軍城(瀬戸内海の水軍, 因島村他家などに関する資料)での館内研修 [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ②【午後：大三島役場での地元講師による講演(大山祇神社の歴史を中心に) [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ③【午後：大山祇神社(参道及び境内)での研修 [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ④【午後：大山祇神社宝物館(神社の関連資料)での館内研修 [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

<2日目>

- ⑤【午前：子規記念館(道後松山の歴史, 子規とその時代, 子規のめざした世界など)での館内研修 [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ⑥【午前：子規記念館内での地元講師による講演(子規の時代と表現を中心に) [約1時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ⑦【午後：松山市内(松山城, 子規・漱石関連史蹟など)での研修 [約4時間]]

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

<全体>

- ⑧【上記五つの研修イベント以外(行き帰りのバスの中, 食事, その他自由時間)の自由時間】

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

- ⑨【今回の研修旅行は“瀬戸内海中部(芸予)の古代から近代にかけての日本語文化に関わる民俗資料及び文化資料を, 実地踏査し, 地域文化を通して専門領域へのアプローチを行う”ことを目的として行なわれましたが, そのねらいは, 総合的にどの程度達成されましたか】

〈自己評価〉 〈コメント〉

1 2 3 4 5

(II) 研修旅行のイベント企画について（企画に対する評価）

- (a) 以下の基準で、それぞれの項目の1～5の数字に○（マル）をつけ、評価をして下さい。
 1 ひどい 2 あまりよくない 3 普通 4 よい 5 大変よい
- (b) それぞれの項目について、できるだけ意見やコメントを書いて下さい。

〈1日目〉

- ①【因島水軍城内研修（瀬戸内海の水軍・因島村上家関連資料による中世の瀬戸内海文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5
- ②【大三島役場での地元講師による講演（大山祇神社の歴史を中心とした地元文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5
- ③【大山祇神社（参道及び境内）研修（中世を中心とした地元文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5
- ④【大山祇神社宝物館内研修（大山祇神社関連資料による地元文化の理解）での館内研修〔約1時間〕】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5

〈2日目〉

- ⑤【子規記念館内研修（松山の風土と子規・漱石の背景としての近代の文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5
- ⑥【子規記念館内での地元講師（館長）による講演（子規の表現にみる近代の文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5
- ⑦【松山市内（松山城，子規・漱石関連史蹟など）での研修（松山の地元文化の理解）】
 〈自己評価〉 〈コメント〉
 1 2 3 4 5

(III) 研修旅行の日時・日程・費用・場所について

※それぞれの項目の該当する番号に○（マル）をつけて下さい。

- ①【3月13日(火)～14日(水)(春休み中)という時期は専攻行事、他の大学行事を考慮して決められましたが】
- (1) 年末・年始を外した冬休み中に実施するのがよい。
 - (2) 今回のように春休み中にするのがよい。
 - (3) 夏休みの終わりに実施するのがよい。
 - (4) 夏休み始めの集中講義終了後（8月7日前後）に実施するのがよい。
- ②【研修旅行の日程は費用を考慮し1泊2日としましたが】
- (1) 今回のように1泊2日でよい。
 - (2) 費用を2万円程度自己負担しても2泊3日ぐらいがよい。
 - (3) ♪を3万円 ♪ 3泊4日ぐらいがよい。
 - (4) 日帰りでよい。

※(2)～(4)を選んだ人は具体的な研修プランがあれば書いて下さい。
 [研修プラン]

③【研修目的の達成、1泊2日の日程などを考慮し、今回は、「因島・大三島・松山など瀬戸内海中部(芸予)地区を実地踏査の場所としましたが】

- (1) 今回は大三島・松山(芸予)地区でよかった。
- (2) 萩・津和野(長門)地区の方がよかった。
- (3) 岩国(周防)地区の方がよかった。
- (4) 福山(備後)地区の方がよかった。
- (5) 奥出雲・出雲地区の方がよかった。



※(2)～(5)を選んだ人は理由を書いて下さい。
[研修プラン]

※(1)～(5)以外に1泊2日で研修に行ってみたいあるいは行ってみるとよいと思われる場所や地域があれば書いて下さい。

(Ⅳ) 今回の研修旅行は、実地踏査による地域文化の研究を通じた専門領域への自主的なアプローチを目的としましたが、この点も含めて研修旅行のあり方について、意見・コメント等を自由に書いて下さい。

（Ⅴ） 研修旅行と研修合宿について

※該当する番号に○（マル）をつけて下さい。

【専門領域へのアプローチの方法として、今回のような地元の地域文化の实地踏査を一つのきっかけとする研修旅行の他に、地域研究のテーマの实地調査と発表を中心とした宿泊をともなう研修合宿のようなものも考えられますが】

- (1) 費用が安くすむところ（例 広島市内公共施設 1泊2日3000円）で、研修合宿を全員参加で行う。
- (2) 費用が比較的にかからないところ（例 広島県内及び周辺2泊3日2万円）で、研修合宿を全員参加で行う。
- (3) 費用はかかる（例 京都2泊3日5万円／東京3泊4日7万円）が、研修合宿（旅行）を全員参加で行う。
- (4) 全員参加の宿泊をともなう研修合宿は特に必要ない。

（Ⅵ） 研修合宿について、意見・コメント等を自由に書いて下さい。